

仮面として機能する眼鏡 ——O'Brienにみる体制崩壊の可能性——

高橋 一馬

はじめに

ジョージ・オーウェルが『一九八四年』(Nineteen Eighty-Four, 1949)で描く近未来のロンドンは、“BIG BROTHER IS WATCHING YOU”(4)¹⁾という言葉に象徴されるように、徹底的な監視社会である。至るところに貼られたポスターに描かれたビッグ・ブラザーの視線は、それを見る者の動きをどこまでも追いかけてくる。さらに、町中に配置された「テレスクリーン (telescreen)」²⁾が24時間、住民に対して監視カメラと盗聴器の役割を担っている。そして、定期的に警察の巡回パトロールのヘリコプターが街にやってきては、立ち並ぶビル窓の中を覗いて飛び去っていく。小説の冒頭でこれだけ徹底した監視社会が描かれている以上、この作品において「<見ること>が重要な意味を持つことは明白である。その中で、主人公の Winston を始めとする登場人物の内、およそ四人に一人が眼鏡を掛ける人物として描かれている³⁾ことは、この作品の特徴の一つとして注目できる。

ところが、『一九八四年』における眼鏡の役割を扱った批評は、ごくわずかしは見られない。この作品に関する評論で眼鏡が言及されていたとしても、それはO'Brienという登場人物の癖が「眼鏡を掛け直す」ことであるということくらいでしかない。というのも、本作品が政治的な意味合いを多分に含んだ小説であるために、その批評も大半は全体主義や共産主義といった政治体制、あるいはそれらに対するオーウェルの見解を扱ったものとなっている。例をあげるとすれば、ハロルド・ブルームがこの作品の持つ「近い将来の政治的な警告としての、道徳的な影響力」は認めただうえで、それを『アंकル・トム的小屋』(1852)と比較している。しかしブルームは、『一九八四年』を、「芸術的に劣っている」と評している。彼によれば、この作品が読まれ続ける理由は、あくまで「全体主義的なユートピア」に我々の生活が断続的に脅かされるためという、政治的な側面においての必要性である、と結論づけている(Bloom 5-6)。

本稿では『一九八四年』を、眼鏡という小道具が存分に活用された作品であるという新たな着眼点から読み直したい。そして、眼鏡が作中でどのような効果を及ぼしているかを明確にすることを、第一の目的とする。そもそも、眼鏡は1940年代まで、小説という分野でさほど頻繁に使用されていなかったようである。というのも、作家P・G・ウッドハウスが、小説の「主人公に眼鏡を掛けさせる」必要性を主張していることに、『メガネの文化史』の著者リチャード・コーソンが言及しているからである(コーソン 251-52)。ウッドハウスのこの主張からおよそ10年後に執筆され

た『一九八四年』では、前述のとおり、眼鏡を掛けた主人公 Winston Smith が登場する。⁴⁾さらに、作中では眼鏡を掛けた人物は主人公に限らず、多数登場する。そして、その中で、眼鏡は掛けられたり外されたりすることによって、物語上の小道具として効果的に働いているのである。例えば、Winston は作中において、眼鏡を掛けた二人の人物の裏切りに遭う。Mr. Charrington と O'Brien である。Winston と、彼を罠に陥れる二人がそろって眼鏡を掛けていることは、そこに何か意味があると考えられるのではないだろうか。少なくとも、Winston を裏切る二人に共通して言えることは、本性を隠して彼に近づいてくるということである。言わば、彼らは仮面を被って生活しているのであり、それを象徴的に表しているのが、眼鏡なのである。

本稿の前半では、眼鏡を掛けている登場人物とその描写を詳細に考察することによって、それが仮面としての機能を果たしていることを明確にする。そして後半では、眼鏡を掛けた主要な登場人物である、O'Brien の心理を考察する。彼は「党内中枢 (Inner Party)」の中心人物であり、物語の最終局面で Winston を拷問によって徹底的に痛めつける。それゆえ、O'Brien は強固な性格の持ち主であるとされるが、その心の奥底を知することは容易ではない。というのも、O'Brien は反逆者であるはずの Winston を、自身と「似通った心の持ち主」だと認めているからである。O'Brien を、眼鏡を掛けた仮面者として捉え、その内面を追究することにより、彼が仮面の下に隠している本性が、非情な尋問官としての一面だけであるかどうかを検討する。

1. 眼鏡の役割

眼鏡が作品内でどのような役割を果たしているかを具体的に考察するためには、まず主人公 Winston の視力について確認しておく必要がある。なぜなら彼は、視力がさほど低いわけではないのに、眼鏡を掛けているように思われるからである。Winston が眼鏡を掛けるのは、彼が仕事に従事する時である。

With the deep, unconscious sigh which not even the nearness of the telescreen could prevent him from uttering when his day's work started, Winston pulled the speakwrite towards him, blew the dust from its mouth piece and put on his spectacles. (44)

彼が党の人間として受け持っている仕事は、主に過去の新聞記事などの書き換えである。「過去を支配する者が現在を支配する」という党の方針により、Winston は過去に存在していた人物の履歴を書き換え、時には存在すらしていない人物を造り出すという作業をしている。つまり仕事という名目の下で、彼は常に虚構を生み出すことを強要されているのである。

仕事以外の場面で、Winston が眼鏡を掛けているという記述は見当たらない。しかし、そのためにものが見づらいといった描写もない。むしろ、何の苦もなく生活で

きているといった印象である。そうであるならば、彼が眼鏡を掛けるのは肉体的な理由というよりも、精神的な理由が大きいのではないだろうか。本来であれば反抗心を抱いている党の仕事に従事するために、そしてその忠実な一員になりきるために、眼鏡が必要なのである。それゆえ、Winston にとって、眼鏡は仮面のような役割をしているといえよう。

また、Winston の職場には Tillotson という同僚がいるが、彼もまた眼鏡を掛けている。

He [Tillotson] had the air of trying to keep what he was saying a secret between himself and the telescreen. He looked up, and his spectacles darted a hostile flash in Winston's direction. (48)

彼の眼鏡は光を反射し、その光は敵意を持って Winston の眼に映る。ここでもまた、眼鏡はそれを掛ける人物の心の内を覆い隠すもの、すなわち仮面としての機能を果たしているといえよう。仮面を付けた人物の本心を、Winston は察することができない。

続いて、Mr. Charrington に着目する。彼は、作中で最もその眼鏡の仮面性を象徴する人物である。まずは、彼が登場する場面での描写を確認する。

The proprietor had just lighted a hanging oil lamp which gave off an unclean but friendly smell. He [Mr. Charrington] was a man of perhaps sixty, frail and bowed, with a long, benevolent nose, and mild eyes distorted by thick spectacles. (107)

ここにおいてすでに描かれているとおり、彼の温和な眼は「分厚い眼鏡」によって歪んで見えている。すなわち、素顔を隠すための道具として、眼鏡はその機能を果たしている。Mr. Charrington は、Winston とその恋人である Julia に、密会の場として自身の経営する商店の二階にある小部屋を提供する。しかし、それは党が Winston を陥れるために仕掛けた罠の一つであり、Winston と Julia は、まさにその部屋で安らいでいる最中に、Mr. Charrington を含む党の人間に逮捕されるのである。

Mr. Charrington はその際、自らの変装を解いて彼らの前に姿を見せる。

Mr. Charrington was still wearing his old velvet jacket, but his hair, which had been almost white, had turned black. Also he was not wearing his spectacles. He gave Winston a single sharp glance, as though verifying his identity, and then paid no more attention to him. He was still recognizable, but he was not the same person any longer.

眼鏡を外し、白く染められていた髪を黒に戻した Mr. Charrington は、「認識はできるものの、もはや別人」である。変装を解き、正体を現すと同時に外される眼鏡は、Winston の場合よりも明確に、別人になりきるための仮面として機能している。

さらにこの場面において、もう一つ象徴的な出来事が並行して起こっている。

Unthinkable to disobey the iron voice from the wall. There was a snap as though a catch had been turned back, and a crash of breaking glass. The picture had fallen to the floor, uncovering the telescreen behind it.

‘Now they can see us,’ said Julia.

‘Now we can see you,’ said the voice. (253)

Winston と Julia が隠れ家として使用していたこの小部屋には、党の眼ともいえるべきテレスクリーンが絵の後ろに隠してある。それが、Mr. Charrington の正体の発覚と同時に露わになるのである。絵という仮面が剥がれて、その後ろから眼が立ち現われてくるこの場面は、象徴的である。

ここまでは、作品の中心人物である Winston と Mr. Charrington を主な考察の対象としてきたが、その他の眼鏡を掛けた人物に関しても検討したい。Winston の記憶の中で彼の父親が眼鏡をかけているが、父親は Winston が物心ついたころには蒸発しており、彼の夢の中にすら登場してこない。また、党のスケープゴートとしての役割を担わされている Goldstein も眼鏡を掛けているが、それは単にそのモデルとなったトロツキーが眼鏡を掛けていたことに由来するのかもしれない。⁵⁾しかし、Goldstein は、政府転覆を狙う架空の人物であるゆえに、その存在と実際の存在意義の間にある相違という点では、Winston や Mr. Charrington と同様、表向きと実際の姿が異なる人物とも考えられる。

前述の O’Brien もまた、第三部で彼の正体が明らかになった際、裏切り者で、Winston に対して仮面を付けた人物であったことが発覚する。しかし、O’Brien に関しては後ほど詳しく考察することとし、ここでは眼鏡を掛ける人物であるということに触れるに留めておく。

では、彼らとは反対に、眼鏡を掛けない人物たちには、何か共通項が見受けられるだろうか。まず、彼らは概して、裏表のない性格の持ち主であるという点が指摘できる。主人公の同僚である Ampleforth、Syme、Parsons などは、いずれも「思考警察 (Thought Police)」に捕まる。Ampleforth と Parsons の二人は、後に独房で Winston と再会することになる。ただし、彼らが逮捕される理由は Winston とは異なる。Ampleforth は、キプリングの「ニュースピーク (Newspeak)」版の編集をしているときに、‘Rod’ と韻を踏むため、党に使用を禁じられている ‘God’ という単語を削除しな

かったために捕まる。Syme は「党」のための仕事に熱心になり過ぎる余りに蒸発する。Parsons は、自分の娘が彼の「党」に反する寝言を聞いたと密告されたために逮捕されるが、次のように、独房で Winston と再会したときに、むしろ捕まえられたことに感謝していると語る。

“Down with Big Brother!” Yes, I said that! Said it over and over again, it seems. Between you and me, old man, I’m glad they got me before it went any further. Do you know what I’m going to say to them when I go up before the tribunal? “Thank you,” I’m going to say, “thank you for saving me before it was too late.” (268)

Parsons の逮捕のきっかけは、娘が寝言を聞いたからであるが、大概の音を拾うはずのテレスクリーンが全くの無反応であるにもかかわらず、娘が部屋の外からその寝言を聞きつけるということに矛盾が生じている。子どもの言ったことを真実として、父親の逮捕に踏み切る「思考警察」と、短い期間に立て続けに逮捕される Winston の同僚たちには、党の焦りを見てとることができるかもしれない。つまり、規律を保とうとするあまり、もはやどこまでが党の方針に反対する行為であるかの境界線は曖昧になり、手当たりしだいに、いわば魔女狩りを行っているような印象を受けるのである。しかし、大した根拠を持たずして一人の人間を罪人として扱えることこそが、党の権力の強大さを示しているとも考えられる。ただし、ここで重要なのは、彼ら三人が単純な人間であることと、それゆえ眼鏡という仮面を付けて生活する必要が無かったことである。

一方、Winston の恋人であり、反体制の活動の共謀者となる Julia は、彼と行動を共にする反逆者であるにもかかわらず、眼鏡を掛けてはいない。Julia は確かに、「反セックス青年同盟 (Junior Anti-Sex League)」に所属しながらも、複数の男性と肉体関係を結んでいる。表面に表れている姿と、実際の行動が離反しているという点においては、彼女は仮面を付けて生活している。しかし、彼女も前述の三人と同様の理由から、仮面を必要としていないといえよう。

なぜなら、彼女が特別な視線を Winston に送り続けていることは、物語の序盤から明らかになっており、むしろ彼女が眼鏡を掛けていないことによって、その意味ありげな視線は Winston を捉えているからである。「愛している」という手紙を受け取るまで、Winston は Julia を「思考警察」のスパイであると疑ってはいるが、彼女は自分の欲望、つまり Winston への関心を日常的に隠していたとは言い難い。それゆえ、彼女は「下半身だけの反逆者」と Winston に指摘された際も、否定しないどころか自らその異名を肯定的に受け入れるのである。

Julia が反体制の活動そのものにはさほど興味がないことも、彼女が仮面を必要としていない理由として考えられる。Winston が O’Brien に秘密裏に託された、反政府

団体「兄弟同盟」の教典である、Goldstein の著書『寡頭制集産主義の理論と実践』を読んで聞かせている間に、Julia は眠ってしまう。この場面を次に引用しよう。

Winston became aware of silence, as one becomes aware of new sound. It seemed to him that Julia had been very still for some time past. She was lying on her side, naked from the waist upwards, with her cheek pillowed on her hand and one dark lock tumbling across her eyes. Her breast rose and fell slowly and regularly.

‘Julia.’

No answer.

‘Julia, are you awake?’

No answer. She was asleep. He shut the book, put it carefully on the floor, lay down and pulled the coverlet over both of them. (247)

Winston にとって最も気がかりなことが、いかに「兄弟同盟」の活動に参加し、それを隠し通すかであるのに対して、Julia の当面の問題は、いかに Winston との関係を保つかということなのである。Julia は、自身の欲望に対して従順である。従って、彼女が眼鏡を掛けていないことは、人間的な本質が、彼女と Winston とでは全く異なることを表象しているともいえる。

ここまでの考察により、眼鏡を掛けている登場人物たちは、日常生活を送る上で他人に気づかれてはならない裏側を持った人物であることが分かった。彼らはみな、眼鏡を掛けることによって本性を隠し、それを悟られまいとしている。その反面、「思考警察」に逮捕されることになるとはいえ、自身の信念あるいは欲望に素直な人格の持ち主は、眼鏡を掛けないという共通項で括ることができる。以上のことから、オーウェルは意図的に、眼鏡というアイテムを自身の小説に取り入れただけでなく、それを多用し、さらにそれによって登場人物の性格を描き分けたと考えられる。次章では、O'Brien という人物の仮面性について詳細に検討する。

2. O'Brien の眼鏡の奥に隠された本性

すでに見てきたとおり、眼鏡を掛けているかいないかという基準に照らし合わせれば、O'Brien は眼鏡を掛けているため、仮面者と見なせる。第三部の冒頭まで、彼が体制側の人間であることは読者にも隠されており、Winston を反体制の活動へと誘う「兄弟同盟」の一員であるかのように描かれている。Winston に対して最大の裏切りを行う人物であることから、O'Brien を強大で純粋な悪としてとらえることは妥当である。しかし、眼鏡を外すことで正体を現す Mr. Charrington や、仕事に従事する時だけ眼鏡を掛ける Winston とは異なり、O'Brien は眼鏡を掛け直すことこそするが、それを完全に外すことはない。しかも、Winston が彼を「兄弟同盟」の人間ではないかという考えを持つのも、この眼鏡を掛け直すという一瞬の動作の間においてであ

る。

Momentarily he [Winston] caught O'Brien's eye. O'Brien had stood up. He had taken off his spectacles and was in the act of re-settling them on his nose with his characteristic gesture. But there was a fraction of a second when their eyes met, and for as long as it took to happen Winston knew — yes, he *knew*! — that O'Brien was thinking the same thing as himself. An unmistakable message had passed. It was as though their two minds had opened and the thoughts were flowing from one into the other through their eyes. (20)

このように、眼鏡を掛け直すという一瞬の隙に、視線が行き交い、Winston はそれによって心が通い合ったかのように感じるのである。そして O'Brien は、Winston を罫にかけることに成功している。眼鏡を外した時に、二人の視線は直接交差することになる。おそらく O'Brien は、それを意識して Winston に合図を送っていると考えられる。ここでも、作者オーウェルは眼鏡という道具を効果的に駆使しているといえよう。しかし、O'Brien が眼鏡を一瞬外したとしても、それは Winston を罫にかけるためであり、決して彼自身が素顔や、本性を現したことはない。Mr. Charrington のように、眼鏡を外せば正体が現出するような単純な性格を、O'Brien は有していないのである。

では、O'Brien が眼鏡を掛けることで隠しているのは、「党中枢」の一員としての正体だけであろうか。エドワード・クウィンは O'Brien の眼鏡を掛け直す仕草を「とても人間的」であるとしながらも、彼が「心の眼鏡を掛け直す姿」は見られないと述べている (Quinn 249)。確かに、O'Brien は最終的に Winston の教化に成功するまで、圧倒的な力を見せ続け、一度たりとも自分自身と「党中枢」の方針を疑うことはないように思われる。

しかしながら、尋問中の O'Brien の描写には、「党中枢」の一員としての役割に、機械的に徹しきれてはいないという印象を与えるものがいくつかある。その一つは、彼の微妙な言葉遣いである。第三部の冒頭で、Winston は独房に入ってきた O'Brien に対して、「奴ら（党）はあなたも捕まえたのですか！」と尋ねる。

The boots were approaching again. The door opened. O'Brien came in.

Winston started to his feet. The shock of the sight had driven all caution out of him. For the first time in many years he forgot the presence of the telescreen.

‘They’ve got you too!’ he cried.

‘They got me a long time ago,’ said O'Brien with a mild, almost regretful irony. (273)

Winston の問いに答える O'Brien の「彼らがわたしを捕まえたのはずっと昔だ」という表現は、彼自身が「党中枢」に捕まえられた存在であることを否定するものではない。さらに、彼はその言葉を「穏やかな、ほとんど後悔するかのような皮肉」と共に発している。この「皮肉」は誰に向けられているのだろうか。おそらく、Winston に向けられていると考えるのが一般的であろう。O'Brien は、彼が「党中枢」に属していると伝えられる直前まで、その真実に気づかない Winston を憐れに思っていると考えられるからである。しかし、regretful という言葉は、Winston に向けられたとするには違和感がある。O'Brien は、Winston を捕まえるために、七年間も費やしてきたのである。その彼を目の前にして、regretful という感情は相応しくない。むしろ、「ずっと昔」に「党」の人間になってしまった自分の過去に対する、「後悔」であり「皮肉」ではないのだろうか。

もう一つは、尋問中に垣間見える彼の「疲れ」そして「老い」である。O'Brien は、Winston の尋問に従事する間、彼の現実的で、人間的な姿を晒している。

He [O'Brien] was looking down at him [Winston] gravely and rather sadly. His face, seen from below, looked coarse and worn, with pouches under the eyes and tired lines from nose to chin. He was older than Winston had thought him; he was perhaps forty-eight or fifty. (280)

Winston はこの後もう一度、O'Brien の「疲れ」と「老い」を認識する。

Winston was struck, as he had been struck before, by the tiredness of O'Brien's face. It was strong and fleshy and brutal, it was full of intelligence and a sort of controlled passion before which he felt himself helpless; but it was tired. There were pouches under the eyes, the skin sagged from the cheekbones. (302)

そしてこの時、O'Brien は Winston に以下のように話しかける。

‘You are thinking,’ he said, ‘that my face is old and tired. You are thinking that I talk of power, and yet I am not even able to prevent the decay of my own body. Can you not understand, Winston, that the individual is only a cell? The weariness of the cell is the cell is the vigour of the organism. Do you die when you cut your fingernails?’ (302)

O'Brien は自分を「党中枢」の細胞の一つであるとし、迫りくる自身の死すら、「党」の絶対的な権力の行使には何ら影響が無いことを、力説している。しかし、O'Brien の「48 歳か 50 歳」という見た目の年齢は、おそらく彼の実際の年齢とさほど離れていないだろう。なぜなら、彼自身も疲れと老いを隠せていないことに気付いているからである。老いて、死んでいくことを自覚しているという事実が、彼自身が Winston と何ら変わらない普通の人間であることを示唆している。

O'Brien という人物は、完璧なまでの「二重思考 (Doublethink)」⁶⁾の使い手である。一方で Winston の反体制的な見解を受け入れつつ、他方で党の方針を真実であると確信している。『動物農場』の記者である開高は、その O'Brien について以下のように述べている。

オブライエンはビッグ・ブラザーの侍従の一人なので、はたして彼が自身のいうことをそのまま心から信じ込んでいるのかどうかについては、異師としてのふるまいと発言についてあまりにそれがみごとであるので、異端糾問官としてのそののみごとさも手伝い、あまりに完璧なものは常にどこか無慈悲さと欠落を感じさせるものだから、彼もまた一箇の激烈な、かつ空虚な仮面者なのではあるまいかという一抹の疑いが読後に残される。(『動物農場』263-64)

「あまりに完璧」というこの評価は、O'Brien の「二重思考」の完成度の高さに対する評価である。その一方で、トマス・ピンチョンは次のようにそれを評価している。

小説中、＜二重思考＞の完全無欠の体现者として現れるのがオブライエンである。ウィンストンを誘惑し、裏切り、保護し、そして破滅させもする＜党中枢＞の一員。無条件の誠実さで党体制を信奉しながらも、党の打倒を目指す熱心な革命家を完璧に装うことができる男。自分は国家という大きな有機体の一細胞にしか過ぎない、と彼は考えるのだが、その個性が強烈で自己矛盾に満ちていて、読者に忘れがたい印象を残す。全体主義的な未来像を語る雄弁で冷静なスポークスマンでありながら、愛情省と呼ばれる苦痛と絶望の地でウィンストンを再教育する過程において、オブライエンは、実は、どれほどバランスを欠いた側面があり、いかに現実から乖離している人物であるのかを極めて不愉快な形で徐々に露呈する。(『一九八四年』 490)

ピンチョンも、開高と同様に O'Brien を「＜二重思考＞の完全無欠の体现者」としながらも、「バランスを欠いた側面」があり、「現実から乖離」しているという。これら二者の O'Brien に対する評価を結び付けるものは、彼が完璧であるが故に、組織

の一部というよりも、一人の人間であるという印象を消し去れないということであろう。尋問中に O'Brien は、Winston に対して「お前は最後の人間だ」と通告する。O'Brien は自身が人間であることを止めた存在であること、またそうすることの利点を、Winston にこう述べる。

Alone —free— the human being is always defeated. It must be so, because every human being is doomed to die, which is the greatest of all failures. But if he can make complete, utter submission, if he can escape from his identity, if he can merge himself in the Party so that he is the Party, then he is all-powerful and immortal...' (303)

しかし彼の発言とは対照的に、「二重思考」の片側で、彼は人間であることを止められてはいなかったのである。「党中枢」の番人である O'Brien が、反逆者である Winston の思考を十分に理解し、そして破滅させるのに実に七年の歳月を要したことは、O'Brien という人物の中にその二面性が常に同居していたことを表している。それゆえ、彼は「二重思考」の完全な体現者でありながら、同時に Winston と「似通った心の持ち主」にもなりうる。

オーウェルは、仕事に従事する時だけ眼鏡を掛ける主人公 Winston に対して、決して眼鏡を外すことのない敵対者 O'Brien を描いた。Winston はその眼鏡という仮面の裏側に、反逆者としての思想を押し隠してきた。では、O'Brien は何を隠してきたのか。それは、絶対的な精神力と、圧倒的な権力の行使者である彼も、所詮一人の人間にすぎないという事実そのものなのではないか。

おわりに

本稿ではまず、ジョージ・オーウェルが『一九八四年』という作品において、眼鏡という小道具を巧みに使った作家であるということを指摘した。そして、その眼鏡は仮面として機能しており、眼鏡を掛けている人物とそうでない人物とが描き分けられていることを明らかにした。そして後半では、眼鏡を掛けた登場人物であり、主人公に次ぐ重要人物と言っても過言ではない O'Brien に着目した。最後まで眼鏡を外すことのない O'Brien の中でも Winston と同じ人間的な部分が残り続けており、その揺らぎは、彼が眼鏡を外すのではなく、掛け直すという仕草そのものに表れている。

O'Brien は、彼自身の死が党の支配体制には影響しないと明言していたが、果たしてどうだろうか。彼は「二重思考」を使いこなすことにより、人間という存在を捨て、組織という有機体の一細胞になり変わることができると信じていた。そして、彼のような存在が党を率いていく限り、彼らの支配体制は揺るがないと考えていた。しかし、尋問中に垣間見える彼の老いや疲れは、彼があくまで人間であることを示

している。そうであるならば、この「党中枢」による支配体制は完璧なものとはいえず、いずれ崩壊する可能性が存在していると考えられる。その可能性の一端は、この『一九八四年』という小説がどこで終わるのかという議論に見出すことができる。この小説の最後には、附録と称して、「ニュースピークの諸原理」という解説が付いている。近年、この附録こそが物語の本当の終着点であるという見方がある。たとえばエドワード・クウィンは、以下のように指摘している。

... the novel has two endings: One focusing on the ravaged face of Winston and the other, near the conclusion of the Newspeak Appendix, when the anonymous author of the appendix was living in a world where Newspeak project has not succeeded and the principles of democracy were still alive. (Quinn 251)

もし、O'Brien 亡き後、彼のような人物が現れず、ありとあらゆる人間を逮捕し続けたとしたら、「党」の支配体制が遠からず崩壊したとしても不思議ではない。『動物農場』においてオーウェルは、成功しない革命を描き、繰り返される専制政治の可能性を示唆した。しかし、『一九八四年』の最後は、『動物農場』のそれとは対照的である。彼は本作品で、人間による人間に対しての徹底的な支配体制を描き、そのうえでそれが永久的には続き得ないことを示したと考えられるのである。

註

- 1) 原文からの引用は全て Penguin Classics 版の、*Nineteen Eighty-Four The Annotated Edition* (London: Penguin, 2013)による。また、引用の際は括弧内にページ数のみで記す。
- 2) 『一九八四年』に頻出する、架空の事物に関しては、鍵括弧の中に日本語と原語を表記することとする。また、それらの日本語訳は高橋和久訳『一九八四年』（早川書房, 2009）に準ずるものとする。
- 3) ここでの登場人物とは、作品紹介で名前が挙げられている、主要な登場人物を指す (Bloom、Quinn などを参照)。
- 4) 眼鏡を掛けた小説の主人公としては、オーウェルも愛読したという『ガリヴァー旅行記』（1726）のガリヴァーがその始祖であると、パット・ロジャースが指摘している。(Rivero 320)
- 5) 『メガネの文化史』には、トロツキーの眼鏡を掛けた肖像画が二枚、1930 年代における眼鏡の普及を証明するものとして掲載されている。
- 6) The power of holding two contradictory beliefs in one's mind and accepting both of them. (Quinn 412)

参考文献

- Bloom, Harold, ed. *George Orwell's NINETEEN EIGHTY-FOUR*. NY: Chelsea House, 1987.
- Orwell, George. *Nineteen Eighty-Four*. London: Penguin, 2013.
- Quinn, Edward. *Critical Companion to George Orwell: A Literary Reference to His Life and Work*. NY: Facts on File. 2009.
- Rivero, Albert, J, ed. *Gulliver's Travels*. NY: Norton, 2002.
- Rorty, Richard. *Contingency, Irony, and Solidarity*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- オーウェル, ジョージ 『一九八四年』 高橋和久訳, 早川書房, 2009 年.
- . 『動物農場』 開高健訳, 筑摩書房, 2014 年.
- クリック, バーナード 『ジョージ・オーウェル—ひとつの生き方』 河合秀和訳 岩波書店, 2000 年.
- コーソン, リチャード 『メガネの文化史—ファッションとデザイン』 梅田晴夫訳 八坂書房, 1999 年.
- ファイヴェル, T. R. 『ジョージ・オーウェル』 佐藤義夫訳, 八潮出版社, 1992 年.

The Function of Spectacles as Masks: Examining the Possibility of the Collapse of the Regime through O'Brien

Summary: In George Orwell's *Nineteen Eighty-Four* (1949), several characters are described as wearing spectacles. First, in this thesis we suggest that these spectacles function as masks which conceal the character's backgrounds or their true selves. We focus especially on the protagonist Winston, and the two betrayals by Mr. Charrington and O'Brien respectively, who work for the 'Inner Party'. Further, we closely examine O'Brien's disposition which is concealed behind his spectacles. He is described as the perfect embodiment of 'doublethink' and implicit power. Finally, we argue for a possibility of the collapse of the prevailing party of the regime.